

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポルケ谷九〇四 電話(03)377-4649 FAX(03)299-5367
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言	2
国労とともに行動を	2
国民各層に密着し、党の組織力強化を	3
——衆院選、結果と教訓(一)——	
◇総選挙闘争(1)◇	6
「会派問題」が次の課題に	6
——兵庫一区からの報告——	
労戦方針、またも提案できず	11
——都職労臨時大会から——	
資料(1) 都職労の労働戦線方針に関する対応について	12
資料(2) 「全労協」九〇春闘方針(一)	13
“二度目”の首切りは許さない!	14
——二月二十四日、J R北海道本社前で総決起集会——	
資料(3) 集会「アピール」	15
組合民主主義が組織問題の焦点	17
——シンポジウム「自治労運動を考える」に参加して——	
読者からのおたより	16
18 編集部だより	16

旬刊 社会通信

NO. 432

一九九〇年三月二日

一九九〇年三月二日発行
(毎月一日・十一日・二十一日三回発行)

■ 巻頭言 ■

国労とともに行動を

国鉄労働組合（国労）は三月九日、第一五六回中央委員会を開催。国鉄清算事業団が解雇予告を発表するなか、三月段階、四月一日以降の態勢確立の方針を決定した。

三月段階の闘いは、(1)政府は国会の付帯決議・公約を守れ、(2)労働委員会命令の早期完全履行、(3)JR会社は中労委の交渉テーブルにつけ、(4)首切りは許さない、(5)労働条件の改善・安全輸送の確保が「闘いの目標」。簡にして要をえた闘争目標だ。

「具体的な闘い」は三つのゾーンからなる。第一は三月十二日から十六日の行動。国労指名スト、東京集中総行動を中心に、じつに多様な闘争形態が駆使される。

東京集中総行動は「国鉄闘争支援中央共闘会議」、東京地評が主催。二千人を目標に(1)関係省庁の運輸・労働省、(2)JR東日本・国鉄清算事業団本社、(3)JRの会長会社のアサヒビール、北海道拓殖銀行、九州電、(4)財界の総本山である経団連、日経連に要請と抗議を展開する。

他は(1)家族会の中央行動、(2)要請ハガキ行動、(3)エリアにおける学者・文化人によるアピールのとりくみ等々。このゾーンの闘いは三月十六日、「全労協」が主催する一万人集会（日比谷野音、午後六時）が区切りとなる。

第二は解雇通告が予想される三月十九日から二十五日の行動。国労は十九日から二十一日、全国統一ストライキ戦術を配置し闘う。

第三は三月二十六日から三十一日の行動。全国統一ストライキは三月二十九日から三十一日の三日間。国労組合員全員が参加する。乗務員は二十四時間ストライキの反復、地上勤務者は半日のストライキ。三月三十日には国労組合員激励・連帯を目的に「連帯スト」もおこなわれる。このゾーンの集約が三月三十日の一万人集会（日比谷野音・午後六時）。左はその日程表だ。仲間と共に参加することを訴えたい。

国鉄労働組合 国鉄闘争支援中央共闘会議

三月闘争日程表

3/5	中労委整頓行動 (国労東日本)	都内區区カマーレード
6	12時 JR東日本・国鉄清算事業団本社前集会 (500名)	11時 JR東日本・国鉄清算事業団本社前集会 (500名)
7	1千万名脱税糾弾	運輸省前張り込み (7日18時～9日11時) (9-12-13-14-15-16)
8	全国会議員総行動 (国分)	提出行動 (7～8日) 地方共闘代表者会議 (13日) 国労会館10時
9	12時 JR東日本・国鉄清算事業団本社前集会 (1000名)	国分第1566回拡大中央委員会 国労会館 出発
10		
11		
12	各日とも8時半から中労委前集会	
13	国労指名スト	
14	東京無中総行動 (1000名)	
15	(12日～16日) ①送オルク②運輸省・労働省③九電・日経連・経団連④JR東日本本社⑤アサヒビール・拓殖	
16	12時 JR東日本・国鉄清算事業団本社前集会 (2000名)	18時 全労協1万人集会 日比谷野音 (最終総行動)
17		
18	歩行者天国での重征行動 (都内)	
19	指手劇の動き	
20	最大の山場 (国労スト)	
21	歩行者天国での重征行動 (都内)	
22		
23	12時 JR東日本・国鉄清算事業団本社前集会 (3000名)	JR会長会社整頓行動
24		
25	11時'90 国民春闘勝利! 中央大集会 代々木公園	
26	国労清算事業団中央総行動 10時渋谷公会堂 (3000名) - JR会長会社整頓行動	
27	国労波状 (全乗組員参加) スト (3・29～31)	
28	3月決 嵐 全 国 統 一 行 動	
29		
30	12時 JR東日本・国鉄清算事業団本社前集会 (4000名)	JR会長会社整頓行動 3・30日比谷1万人集会 18時
31		
4/1		
2		
3		
4		
5	東京総行動 (東京地評・全国共闘会議) 18時 日比谷野外音楽堂	

国民各層に密着し、党の組織力強化を

——衆院選の結果と教訓(二)——

我等は、何をなすべきか

我々は、今次選挙闘争を総括し、何をくみとり、何をなすべきなのか。その内容は、前号の記述の中で、明らかになっているが、大要を記せば、次のとおりであろう。

自民党勝利の最大理由は、社会党の動揺、組織力の弱さである。参院選比例区で、社会党は三五%、自民党は二七%の得票率である。この段階で、前記のように消費税廃止、その財源として、軍備縮小、巨大資本累進課税を提起し、一大国民運動をおこなすなら自民党打倒は、可能であった。このとき社会党は、反独占・反自民の基本姿勢をとれない、公明、民社の土俵にひきづりこまれ、自民党離反層の焦燥をかっていたのである。

なぜ、このことができなかったのか。八百万連合が成立し、その指導部は、反独占・反自民の立場をとり得ず、社会党の変質を迫った。社会党は組織力は弱く、連合の脅迫をはねのけ、職場組合員、市民運動を信頼し、独自で大衆行動を組織することができなかった。自民に匹敵する候補者を擁立して政権を奪取する力もなく、連合政権構想にひきづりこまれたのである。

このとき、自民党は危機バネをフルに回転し、財界あげての自民党支援体制を構築した。政治闘争は、基本的に政策の闘争だが、大衆が立ち上がるためには、行動に踏み切る契機が必要である。理性は、感情により行動に転化する。このとき、決定的契機となったのはリクルート汚職である。つまり、つもった不満は、この汚職により点火され参院選で大衆感情は爆発した。しかし、感情は時と共に鎮静化する。自民党は時をかせいだ。大衆感情を鎮静化させ、消費税になれさせ、農業問題に手をうつてきた。我々は、この政治闘争に破れたのである。その結果、参院選で、社会党に結集した層は、苦渋の選択を強いられたのである。商業紙の主張するように、バランス感覚で、自民党を選択したのでない。その証拠に、社会の独自候補、一四九名中一三五名の当選をかちとっている。大衆は社会党の路線を危惧していない。組織力、闘争力を強化するなら、衆院選でも参院選比例区の票を現実化することは可能であった。

しかるに、社会党は、歴史の転換期ともいべき激動の六ヶ月の教訓を汲みとることができず、基本路線転換を求め、政・財・官の圧力に動揺し、冒頭のべたように、民社、公明のいなおりともいべき追及をうけても山口書記長は反論できない。

今次総選挙の結果、社会党は、一四一名かちとり、民社、公明は、激減した。創価学会の腐敗と、墮落は、天下に明らかになりつつある。これを基盤とした宗教党や、動揺する小生産者、中小企業に依拠する旧い体質の民社党が、中間政党として、今後力を回復することは不可能であろう。この両党は総選挙直後、社会党との政権協議に応ぜず、土井たか子首班指名をも拒否している。自民党との「部分連合」でもくむようなことがあれば、次期総選挙での壊滅は必至であろう。

自民党の危機は内包されている

自民党は国民に苦渋の選択を強いることに成功した。しかし、しばしば述べたように、参院選大敗の要因は構造的なものである。社会党の闘争戦略のあやまりと、自民の危機バ

ネにより、今次総選挙では、自民党が勝利した。

しかし、その構造的諸問題は、総選挙後いつきよに噴出する。農業政策で、「米の自由化、減反政策の中止」を公約したが、アメリカは、これを許してはおかない。対米貿易により巨額の利益を手に入れている日本独占資本は、米を含めての農産物自由化は、当然のこととして、政府に迫る。労働組合、「連合」もこれに賛成である。米の自由化は時間の問題である。軍拡、産業構造転換をやめようとする自民党は、いかなることがあっても消費税の存続を計る。よしんば、存続したとしても、消費税により巨額の利益を手にする企業、非課税業者には、手を入れざるを得ない、この層の離反は必至である。日米構造協議の主要課題に「大規模小売店規制法撤廃」が、問題となっている。アメリカの強い要求を、共通の利益をもつ日本独占は支持している。要求に屈することは、時間の問題である。独占の土地獲得要求のため、「都市農地宅地並み課税」は既に実施に踏み切っている。零細商小工業者、農民は再び自民党から離れることは必至である。

特に重要なことは、今次総選挙にみる空前の金権選挙、利益誘導体質の強まりである。リクルート議員は、巨悪・中曾根をはじめ、ほとんど当選し、「みそぎをすました」と称し、党、政府中枢に返り咲いている。政治改革は、ほうむりさらされた。学者・評論家・商業各紙は、第二、第三のリクルート疑獄発生は必至と述べている。

日本財界は、このことを危惧している。公明、民社には見切りをつけている。であるからこそ総選挙直後から、各財界首脳は「社会との話し合いに応ずる」ことを明らかにし、その第二保守党化に意欲的である。自民党、金丸と、太いつながりをもつ社会党田辺は、規約改悪、新宣言すら廃案し、基本路線転換に並々ならぬ意欲をもやしている。

社会党は、自民党の危機を救うため、受皿となる必要は全くない。そのとき、社会党は労働者、勤労国民の支持を失い、民社党と同じ運命を辿ることになる。いま社会党のなすべきことは、昨年、参院選で勝利した基本路線の正しさに確信をもち、反自民・反独占の闘争を強化することである。そして国民各層が再び苦渋の選択を強いられないよう社会党単独で、自民党に代わり得る組織力、闘争力を身につけることである。参院比例区の得票を想起せよ。社会党は三五%、自民党は二七%の得票率である。

国民は腐敗した自民党に代わり、社会党中心の政権を望んだのである。社会党は、この期待を受けとめる主体的組織力がないことを今次衆院選で立証したのである。いまなすべきことは、きたるべき自民党崩壊の危機に当って、これに代わり得る主体的組織力、闘争力をつけるための具体的方針を提起し、それにむけて全党あげての奮闘である。一度の失敗は許される。この失敗を教訓化しない、再度の失敗を国民は、決して許さないだろう。

連合の矛盾拡大

最後に、連合について、ひとことつけ加えておく。二月二十七日、毎日総選挙後、連合内部の矛盾が激化していることを報道している。連合内部旧総評系は、今次総選挙で、八三人社会党から立候補させ、九〇%、七五人の当選をかちとった。これに対して旧同盟系では、民社中心に一人立候補させ、当選は五人という敗北であった。旧同盟系は、連合、社会党に利用されたと怒っている。前記のように今回、連合候補は、全国四名、当選は大坂一名である。特に、昨年、参議院選岡山でも、今回の群馬でも、連合候補は、日教組組織内候補に破れている。山岸は、社会党山口書記長、日教組幹部に対し、名ざしで批判し、これをかくそうともしない。社会党が基本路線を堅持し、組織力を強めてゆくならば、連

合内部の矛盾は激化する。財界と一体の、その政策は内部からの批判にさらされる。連合路線を転換させる好機というべきであろう。

いずれにしても、連合指導部、指導路線は日本労働運動、政治運動のガンである。巨大企業と一体になり、労働者を抑圧し、会社独裁の日本社会をつくり上げていく。連合主力組合の鉄、電機、自動車総連では、不当労働行為、差別弾圧があとをたたない。であるからこそ国労闘争の前進を恐れ、社会党を脅迫し、海部政権と一体になり、清算事業団闘争を抑圧している。政治闘争では、前記のように社会党の変質を迫り、左を切つて民社党との合同、第二保守党づくりをねらっている。まさに、日本の階級闘争を呑食するガン細胞といわねばならない。日本労働者は、労働、政治両面から、この連合支配とたたかかねばならない。前記のように、我々が職場で地域で、党の変質を許さず、基本路線を堅持し、反合理化、職場闘争、春闘、反原発、反核平和闘争をたたかうことが、連合と社会党の矛盾、連合内部の矛盾を拡大する。

財界、連合指導部は、ルーマニア、チャウシエスクを、社会主義独裁と非難する。しかし、日本財界、連合指導部は、労働者を過労死に追いこむ、会社独裁ではないのか。この独裁を打倒する客観情勢は成熟していることをみきわめ、共に奮闘しよう。

参院比例区を上まる得票Ⅱ高沢寅男

社会党の基本路線を守り、日本の労働・政治運動を前進させるため、社会党・高沢寅男はもっとも重要な役割を果たす人物の一人である。今次衆院選で高沢は、一二万四千六百票をとり、第一位で当選を果たした。この票数は参院比例区二万九千票を五千票上まわっている。

東京全体で、比例区は、一五三万八千、三〇%。今回は、一四四万、二四%である。各選挙区をみても、比例区以上に票を拡大したのは、二名当選を果たした一区だけである。全国で見れば、一九六八万、三五%。今回、一六九三万、二六%である。前記のように、全国はもちろん、東京でも、参院選以後、社会党が得票率、票共に減らしているとき、高沢が票数を拡大した意義は、大きい。

八九年、参院選挙後、我々はどうのような活動を練馬、豊島ですすめてきたのか。その基本路線は、既に参院選直後、岩井章、高沢寅男、宮坂要、坂牛哲郎が討論し、社会通信から出版した、号外「我等はいま何をなすべきか」につきている。

党の基本路線の堅持、労働者闘争の強化、連合、全労連の地区労解体の動きに抗して、地区労・地評擁護、職場闘争、地域闘争の強化である。

特に練馬では、生協、婦人、文化人運動が活発にすすめられている。高沢後援会会長・松尾均、有権者同盟会長・本尾良、政治学者・篠原一等を中心に、多様な運動体が存在する。その思想、イデオロギーは、決して統一はされていない。運動は交錯しているといっても良いであろう。

この交錯する運動の中で、高沢地域、労組後援会を、小単位につくり上げていった。労働組合OBは、都労連退職者会を組織すると同時、地区後援会の中心メンバーとなり、活動してきた。

我々は、定例学習会をもち、諸運動の報告点検を行い、基本学習をつみ上げてきた。テキストは、向坂逸郎「日本革命と社会党」。これが終わってから東欧情勢等から、社会主義の原点学習のため、山川均「社会主義への道」を読みはじめた。多忙の高沢寅男をはじめ、区議、総支部書記長等は、必ず参加してきた。

この中で、我々が意志統一してきたのは、社会党の変質を許さない大衆闘争強化のたかいかいである。連合政権は否定するものではない。しかし、それは社会党の基本路線を前提にしての連合である。

高沢寅男は、参院選後、六ヶ月、この原則を貫いて諸活動を展開してきた。国会闘争、テレビ討論、文筆活動、インタビュ等。大胆に、明確に、この主張を展開してきたことは、皆さんご承知のとおりである。選挙戦で、一貫して主張したのは、消費税廃止、金権政治打破、反核、平和、軍備縮小である。特につけ加えておくならば、企業献金廃止と共に、労働組合献金廃止。政治献金は、個人献金を、はっきり訴えたことである。連合が、組合献金で、社会党議員にひもをつけ、党の変質を迫っているとき、この提起は重要であろう。市民運動で活動する人々は、企業献金と同じように、この組合献金に反対である。社会党を左右する、旧い体質に反発していることは、重視すべきであろう。

党の基本路線を守り大衆闘争

選挙闘争は、以上の日常活動の集約として展開された。従来とさして異なるところは無い。特徴として、今回は、後援会組織が、労組活動より活発であったこと。労組では、国労、清掃、水道等、反連合組織、連合でも、東交、全通、電通反合研等がよく動いた。電通は、公明・長田を支持し、高沢を排除してきたが、今回は特に最終段階で、高沢攻撃のデマ文書を、組合員に配布した。連合本部にてこ入れと思われる。これに抗して、全都から最終日、青年共闘が結集し反撃した。

今次選挙で、多くの良心派、新人が当選した。この中で、一貫して、党の基本路線を守り、国労闘争を共にたたかってきた高沢当選の意義は大きい。しかも、参院比例区以上の票をとり、一位当選である。高沢のようにたたかい、連合から目の敵にされても落ちることではない。このことは、大衆に密着してたたかう、良心派、新人国会議員の大きな、はげましとなるであろう。社会党議員団が、その流れを主流とし、国民各層に密着し、その先頭に立ってたたかうなら必ず、党の組織力、闘争力は強化される。そのときこそ、自民党に代わり、政権を担当し得る党に成長するだろう。(坂牛哲郎)

◇総選挙闘争(1)◇

「会派問題」が次の課題に

兵庫一区からの報告

祝電に感激

Tさん、いろいろとご心配いただいたり、たくさんのカンパを送っていただいております。ありがとうございます。岡崎宏美の当選を果たせてほんとうによかったと思います。私にも、当選の決まった翌日から全国のあちこちの人にお祝いの電話や電報をいただきました。去年の一〇月に、国鉄県民会議が国労博多支部の家族会の逆オルグを受け入れたときに神戸にいられた家族会の方から、家に祝電が届いていたときには、ほんとうに感激しました。

今回の選挙は、全国の仲間からも注目されているのを実感できました。昨年末の党兵庫県本部大会へ警察を導入するという、石井亮一(ご存知のように、彼は党県本部副委員長を兼務している連合兵庫初代会長・兵教組委員長です)氏たちが演じた醜態や党兵庫本

部の異常な状態が、全国的に少しずつでも知れわたってきたからだと思います。そんな中で、岡崎宏美が当選できて、全国の仲間の期待に応えることができたと思っております。

一議席獲得は二七年ぶりの快挙

選挙の結果についてはおおよそご存知だとは思いますが、少しだけ兵庫一区の特徴についてご報告したいと思います。

兵庫一区は定数五名で、今回は九名が立候補しました。しかし実質的には自民党の二名と公・共・民の各一名、それに社会党（といっても、岡崎は「無所属」でしたが）の二名の、五党七名で争いました。この選挙区は二十年間、五党六名の不動の顔ぶれでやってきたところですから、実質的に社会党が複数擁立したことによって選挙戦の様相が一変してしまいました。私たちにもよくわかりませんが、他の陣営にとっては社会党二名、とくに「岡崎」が読めないといったところではなかったでしょうか。

結果は、岡崎宏美は九万三千六十五票、得票率一三・一%、最下位ではありましたが初当選を飾ることができました。社会党の公認候補は第一位当選で、社会党は実質的に兵庫一区で複数議席を回復したことになります。ちなみに兵庫一区では、社会党が二議席をこの前獲得したのは一九六三年のことであり、当時は定数三名で、河上丈太郎・五島虎雄の両氏が当選したのです。ですから兵庫の社会党にとっては、実に二七年ぶりの快挙でした。神戸市内だけでなく県下の多数の黨員・活動家や党支持者は素直に感激していますが、党県本部を牛耳る石井一派（あえてこういう言い方をしますが）は、いまだにこの一区での社会党の勝利（岡崎も含めた二人当選、二七年ぶりの快挙）に、敵対的とさえいえる冷やかな態度をとりつづけています。選挙後、二月二七日に特別国会が招集されましたが、石井一派の強硬な反対によって、十五年の党歴をもつれつきとした社会黨員である岡崎宏美の「社会党・護憲共同」入りは実現していません。岡崎宏美の「党派問題」は、こんご全国的にも大きくとり上げねばならない課題だと思っています。聞くところによれば、国会周辺の空気は同じ党派に迎えるのが当然だというものなのですが、当り前のことでしよう。あまりの異常さに最近では良識ある党外の支持者からもひんしゅくを買っています。兵庫ではここ数年、兵教組・電通労連の直轄支部による大会での多数を背景にした異常な社会党の運営が目立つようになっていましたが、今回の選挙をきっかけに常軌を逸した党機関運営・党組織私物化の実態は、かえって増幅されたようです。（党派のことでいえば、岡崎さんは無所属で、院の控室は中曽根康弘・藤波孝生など錚錚たる面々と同じだそうです。）

岡崎擁立に二万六千人の署名

さて今回の選挙戦ですが、いちばん大きな問題は、あくまでも社会党公認でたかかうのか、無所属でもたかかうのか、ということでした。これは今回の選挙結果からすれば、私たちが考えていたよりもはるかに強い影響を選挙結果の全体に及ぼしています。

ご承知のように、結果的には岡崎宏美は「公認」はおろか「推薦」さえとりつけることができませんでした。他方の「公認」になった候補者がほとんどともに党活動もせず、党費も二年間ほど滞納していたと自分でおっしゃるほどの方で、ついでこの年明け早々には神戸市北区にある恵泉寮という児童福祉施設で社会黨員を含め六名の全国一般の仲間の首

を切った当事者（張本人）であることを考えると、どうしても我慢のならないことです。

私たちは、候補者も含めてあくまでも、岡崎宏美が社会党の公認候補になるのは、候補者の資質・活動の経験からいっても、党内での議論や決定の手続きからいっても、ごく当然のことだという立場を貫きました。実際に、一区協の全総支部にあたる八総支部が推薦を決め、全党員の八割をこえる党員の賛同署名があり、しかも党外の「女の会」「送る会」（いずれも岡崎宏美を衆議院へ、と組織された後援団体）の約二万六千人の署名が寄せられていたわけですから、社会党の候補として申し分ないのです。

県本部（石井一派は、岡崎公認を徹底に妨害しました。全く派閥次元の横車としかいえない）があります。党県本部がどういう状態かは、兵庫党建設研究会発行の小冊子『党内民主主義の蹂躞を許すな』をお読みいただいでご案内のことと思います。はつきり言って、党県本部執行部は、執行部としての機能を喪失しています。県本大会をやるのに警察を会場に入れるのですから説明はいらないでしょう。

県本執行部がこういう状態で、一区の問題だけでなく二区の問題（堀昌雄氏の定年問題）五区の問題（最終的に吉岡賢治氏は無所属・連合推薦となったが、結論が出たのは公示の直前）と、何ひとつ自前で片づけられないのですから、一区協が中央本部に直接に公認申請するという変則的なことになったのです。しかし中央本部も結局は自らの主体的な判断は下しえないまま、県本部に引きずられて、自らの決めた複数擁立方針さえ宙に浮かしたようです。中央本部としては、さすがに兵庫一区の状況と京都・高知とは違うくらいは理解できたでしょう。最終的に、岡崎については処分はしない（当たり前だ）、党員として選挙するのはかまわないとなったみたいです。

「公認」をめぐる経過はこんなものですが、石井一派の執拗な恫喝（警告など）や中央本部への圧力もあったし、選挙期間中の統制の特例を認めた規約の条項もあって、たえず「処分」と背中あわせに今回の選挙闘争をやってきました。ごく一部を除く一区協の党員や県本部内の良心的党員の多数が私たちの味方でしたから、処分の脅しに屈するようなことは全くなかったと言ってよかったです。候補者自身の処分はできるならば避けたいという気持はありましたから、最終的には中央本部の指導を受け入れて私たちは選挙戦に臨んだのです。

「公認」と「無所属」。今回ほど「社会党」のネームバリューを感じさせられたことはありません。社会党の公認というだけでたいへんな票を獲得できるのです。こういう中で無所属・岡崎宏美ですから、選挙戦の途中でのマスコミの調査など、選対にとっては厳しいものがありました。しかしその不利をのりこえて勝利を獲得できた基底には、一区協傘下の各総支部の日常活動を通じた住民との結びつき（「公認」候補陣営にはこの要素は全くないといっています）と岡崎支援の県・市会議員、さらに昨年当選したばかりの旭堂小南陵参議院議員の奮闘が大きかったと思います。

いずれにしても、無所属でもやるのかやらないのか。ずいぶん議論もし動揺もあったと思いますが、みんなの共通した思いは、ここまでできて後に退けないということでした。岡崎選挙（複数擁立）はもともと今までの党建設の総括の上に、さらにそれを一歩進めるということが始まった議論でした。この基本線と離れて、岡崎を通したい云々ではなかったのです。これを譲ることはできませんでした。だからこそ選挙戦全体を通して、社会党らしい社会党を代表しているのは岡崎宏美だという誇りが陣営の中に漲っていました。ここに共感して支援した人も数多くいると思います。

走りに走った選挙、地区選対が主役

選挙戦は正式に出馬表明したのが一月七日。それから四十日余、走りに走った選挙でした。今まで兵庫の選挙では、地区選対の役割が軽視されることが多くあって、ともすれば選対本部との間がギクシャクしていたのですが、今回はそんなことはありませんでした。むしろ地区選対が主役でした。大労組に全てをおんぶする格好の選挙態勢が国政選挙の場合には多いのですが、今回はあくまでも党を主体にやりぬくことができたと思います。党を主体——だから中央本部の指導を受け入れて、ポスターはじめ印刷物に「社会党」名を使わないとなった前半の一週間ほどは動きが鈍かったけど、全体を通して地区選対はフル回転だったと思います。一月七日の正式表明が難産だっただけに逆に意思統一は深く進み、闘争態勢もそれこそ地方選を上回るものを実現できました。ここしばらく顔をみないと思っていた党員があちこちで元気に活動していました。社青同・婦人会議もフルに活動したので、いろんなところに子どもつれの活動家の姿がたいへん目立ちました。古くから社会党・総評の運動をやってきた人たちも、次々に事務所へ激励に訪れるという具合です。女の人たちの活動については別項を起さなくてはならないかと思うほどすさまじかったです。「女の会」ができましたが、各地区選対でも行動の中心を担っていました。地区選対の総括会議で、「男は何してたんや」と詰められているところもあるそうです。

労働組合の方にもいくつかの特徴的なことがありました。その一つは、今回の選挙が連合・県評センターができて初めての選挙でしたが、公認を得られなかったという口実で、あまり多くの組合の推薦はとりつけられませんでした。「岡崎は県共闘（ご承知のように兵庫独自の総評運動継承の共闘組織）のマドンナ」というようなデマが盛んに流されましたので、連合主力組合の支持は期待できません。しかし中小労組を中心に驚くほど熱心に支援してくれる労組がでてきたのが、今回の選挙の労対部門での特徴です。

二つ目は、上部機関での推薦とは別に、労組の下部組織に自主的に岡崎を支持する組織がつくられて大きな力を発揮したことです。上部機関の締めつけをハネのけたり、手が届かないのです。

三つ目は、岡崎宏美の出身組合である県職労とりわけ社会保険支部です。公認の問題もからんで県職労自体も推薦決定は公示の直前だったのですが、これを補って余りあるほどとりくみには迫力があつたと思います。通常の動員だと、時間がくればさっさと帰ってしまふのが、仕事が終ってから事務所へ詰めて、夜遅くまで選対の作業をこなす。自主的に活動すると、こんなに生き生きとした表情になるのかという典型みたいなものでした。候補者が楽しく選挙をやりたいと言っていました。社保の若い人々にはそれが感染していたようでした。

目に余る「公認」候補陣営の妨害

もつときちんとした総括が必要ですが、とりあえず特徴だけ報告しておきます。

また「公認」候補陣営の妨害は目に余るものがありましたので、つけ加えて申し上げます。

とにかく彼らの最大の目標は、「岡崎おとし」にあったことは間違ありません。兵教組などはほとんど一区へ集中で、他区からはまともに選対も組めないという苦情がでるほどでした。組合の壁新聞に岡崎の似顔絵と「公認」候補の写真を並べて、岡崎の顔に×を入れ

るといふ人権感覚さえ疑う組合もできました。職場機関紙で相も変わらぬ協会攻撃をやり岡崎を中傷する組合。聞くに耐えないデマ、最終盤の「公認」陣営労対の「岡崎陣営が『土肥ははいつたから社会党を二人にするために岡崎に入れてくれ。だめなら他の党へ投票して』と流している」といふ、社会党に誇りをもって活動やってきたものには決して思いつかない、岡崎陣営を陥れるデマゴキもふりまかれました。

万事がこういう調子ですが、いちばん攻撃が集中したのはやはり旭堂氏や県・市会議員に對してでしょう。陰に陽にの圧力は四六時中ですが、期間中配達証明付の桐喝文が各議員宅へ届けられました。兵教組・全電通・全通などの組合連名の岡崎支援の議員への桐喝でした。

このほかにも各総支部に對して、岡崎の運動をするな、事務所を岡崎選対に使わせるなどという県本部の警告もあつたりしました。

少し長くなり過ぎましたので中途半端ですがこのへんで置きたいと思ひます。

とにかく全国の皆さんの期待にも応えられてよかつたと思ひます。兵庫でやつてきたことは、決して小さくない事業だと思ひます。全国にも広がることを願ひつています。どうもありがとうございました。

〈追伸〉岡崎の会派問題は申し上げた通りの現状で、県本〓石井一派のメチャクチャぶりが増幅されていますが、また今度は、岡崎でやつた例を来年の地方選にまで適用しようとしています。同封の資料、目を通して全国にお知らせ下さい。

〈別表〉

		得票数	得票率(%)
土肥隆一(社)	1	121,436	17.1
石井一(自)	2	115,052	16.2
砂田重民(自)	3	101,726	14.4
渡辺一郎(公)	4	101,219	14.3
岡崎ひろみ(無)	5	93,065	13.1
浦井洋次(共)	次	88,095	12.4
永江一仁(民)	落	58,599	8.3
佐藤洵一郎(無)	落	28,882	4.1
高橋秀夫(無)	落	896	0.1

資料 社会党兵庫県本通達(一九九〇年二月二六日)

統一自治体議員選挙等の候補者擁立方針

並びに公認・推せん等候補者選考について

標記の件、下記によりとりはからいますのでよろしくお願い申し上げます。

一、次期自治体議員選挙の候補者擁立目標は別表の通りとする。

・※印は必ず達成したい目標。

・定数、現有議席数は、一九九〇年二月現在のもの。

・現有議席の()内は、推薦候補で外数。

二、特に県会議員、神戸市会議員に関しては「候補者選考委員会」において、党内外からの推薦を受け選考にあたる。

・したがって、県本部への上申(推薦)者は、総支部・支部、党员、協力党员、支持団体、友誼団体等特に資格はとわない。

・選考基準は次の通りとする。

・人格・識見にすぐれ、原則として責任ある組織・団体の推薦・支援を得ることができ

るか、その見込みがあるとともに下記事項を遵守すること。

- (1) 「新宣言」にもとづく党改革を積極的にする。
- (2) 「組織改革の具体的構想」ならびに「運営要綱」にもとづく党運営に努める。
- (3) 「新連合」路線を積極的に評価し、支持する。

※最終選考に当たっては、県本部執行委員会に「誓約書」の提出を義務づける。

三、一名区を中心に、無所属「連合型」の候補または選挙協力によって候補者の擁立をはかり、自民党の過半数割れを実現する。

四、市・町については、県本部と「協定」を締結した上で、推薦する。

以上

労戦方針（自治労脱退）、 またも提案できず

——都職労臨時大会——

都職労の第七六回大会が二月二十八日開かれました。これは、昨年十月の第七五回定期大会で都職労方針「新『連合』」に参加せず…」（中執原案）を提案しましたが、中執原案の撤回を求める動議がだされ、今臨時大会まで職場討議を重ねることになっていました。

大会を前にした支部代表者会議では、五十支部中四十九支部の代表が参加し職場討議を集約する形で議論を重ねました。主流派支部からは二十九支部の原案支持が表明され、あくまで原案支持を土台にすべきという主張でしたが、その後の中執で「中執原案が組合員の支持を得ているという現実をふまえ、中執原案では都職労の団結が守れないため、慎重な対応を求めるという意見も出され、結論に至らなかった支部も少なからずあった同時に、労戦問題をめぐる討議のなかで主張や見解の違いはあるものの、反『連合』の方向と、特に十三万の団結を守るという組合員の意志が表明された」とし、第一号議案としては資料の「都職労の労働戦線方針に関する対応について」に変更されました。

また、二号議案として提案された春闘方針「都職労九〇国民春闘方針（案）」では、都職労は「九〇国民春闘共闘委員会」「東京春闘連絡会」など、春闘再構築をめざし闘う労働組合の総結集を軸として、運動を展開する方針を提案しましたが、問題となった自治労・公務員共闘のストライキ批准投票は、提案説明で実施するむね表明、賛成多数で決定しました。

この結果、組織問題は先送りされ、当面は反『連合』と十三万の団結を守る方針で運動をすすめていくことになりました。

今大会は、都職労が「自治労から脱退して新しい自治体産別組織を結成し、全労連への加盟をめざす組織選択」に踏み出すかどうかが焦点でした。結果は、昨年定期大会につづき、今回も本部原案は提案できませんでした。これは、「分裂を避けよ、慎重に」という職場の声が反映された結果といえます。

また、大会討議では「中執原案に半数以上の支部から支持、賛意が出されている」との報告に対し、「その内実はどうか」との疑問が出されました。「職場討議」の実態は組合員の理解と合意が深まったというよりは、採決などで強引に機関決定をしようとしたところが少なくありません。

春闘方針討議では、(1)自治労・公務員共闘のスト権批准投票をするのか、しないのか、(2)東京段階の春闘は、東京地評を軸にし闘うのか、全労連系組織との共闘を重視するのか、

が争点でした。

総評が解散し、新「連合」・全労連・全労協という新しい全国組織の結成後の初の春闘、九〇年代の幕開けの春闘というかけ声に比して、春闘再構築の方向、現場からの闘う方針確立という点では「討論は不十分」といわざるをえませんでした。(都職労・V)

資料(1) 都職労の労働戦線方針に関する対応について

都職労は自治労が第五六回定期大会で新「連合」への加盟を決定するという重大な事態のもとで、これまでの大会で確認してきた「連合」に参加せず階級的ナショナルセンターの確立と十三万組合員の団結を守るという方針を踏まえ、都職労第七五回定期大会で都職労労働方針「中央執行委員会原案」の職場討議を全員一致の確認のうえ行い、二月八日、及び二月二十一日～二十二日、支部代表者会議で集約し討論を行った。

ここでは、「都職労中央執行委員会原案」に半数以上の支部から支持・賛意がだされるところにも反対する支部の意見も出され、また結論にいたらなかった支部の意見も表明された。その中で、反「連合」の方向と都職労は職場・支部をはじめ、十三万が団結すべきであるとの職場組合員の声がよく表明された。

都職労中央執行委員会はこの到達点をふまえ、次の対応を行うものとする。

- 1 都職労がこれまで一貫してすすめてきた反「連合」の基本を堅持する。
- 2 都職労総団結の基礎である都職労綱領および自治労基本綱領を守り、都職労十三万組合員の団結を守り、その組織と運動を維持し強化、発展させる。
- 3 都職労が進める運動路線は、一致する要求にもとづく共同闘争を進展させる立場から、反「連合」をかかげて闘うすべての労働組合との共闘体制を確立し、組合員の要求実現のために闘う。

なお、一致する要求でのいかなる労働組合とも共闘が進展するよう努力することは当然である。

4 ナショナルセンター、および全国産別の組織選択については都職労十三万組合員の団結を優先し、かつ都職労組織の特性(支部をもって構成されている等)運営の実態に即して対応するために、次の点をふまえ「労働戦線問題対策委員会」(仮称)を都職労中央執行委員会のもとに設置し五月までに成案をえるものとする。

なお、自治労との関係については以上の趣旨、およびこれまでとってきた扱いにもとづき対応する。また、大会に提出された「都職労中執原案」については、この委員会に付託し、検討するものである。

この「委員会」は、都職労中央執行委員会の諮問機関として構成し、運営は都職労中央執行委員会決定する。

① 「都職労中執原案」が職場討議の中で半数以上の支部から支持・賛意がだされていることをふまえる。

② 一方、「中執原案」に反対する支部や、結論にいたらなかった支部もあったことをふまえる。

③ 職場組合員からの声である都職労十三万の団結を守る立場で検討する。

5. なお、「都職労労働問題対策委員会」(仮称)の成案にもとづき、都職労臨時大会を六月目途に開催し決定する。

資料2 「全労協」九〇春闘方針(一)

私たち全労協は二月九日に「結成大会」を成功させ、初年度の大闘争として九〇春闘にとりくみます。

私たちは、総評・地県評、地区労働運動が蓄積してきた良き積極面を継承・発展させると共に、その弱さを克服し、新たな日本労働運動の自立と創造を目指して運動を進めます。

一、全労協の運動の基調

全労協結成大会で決定した「全労協の基調と目標——労働運動の自立と創造」の闘いの目標と第一回常任幹事会の意見を加味して、九〇春闘を初めとする全労協運動の基調を次の通りに据えて闘います。

- (1)労働者の生活実態にもとづき、大幅賃上げ、全国一律最賃制の確立、労働時間短縮、労働条件の向上、あらゆる差別に反対し、不当労働行為を許さず、中小・未組織労働者を含むはたらく者すべての労働基本権の確立をめざして、ストライキを含む多様な戦術をもつて闘います。
- (2)職場の闘いを強め、独占資本の産業空洞化・人べらし合理化政策と対決し、首切り合理化・労働強化反対、安全確保・労災補償制度の拡充、政府の責任による完全雇用政策と失業保障を要求して闘います。
- (3)社会保障制度の確立、快適な公的住宅建設、所得税と大企業優遇税制、不公平税制の是正、消費税廃止、生活関連社会資本の整備・拡充を要求して闘います。
- (4)女性労働者の団結を強化し、女性の労働権の確立と拡大をはかり、男女平等の社会の実現をめざします。そのため、女性差別撤廃条約の精神にもとづき実効ある男女雇用平等法の制定・母性保護の充実・男女平等を促進する労働条件の確立をすすめます。
- (5)企業別労働組合主義の弱点を乗り越え、あらゆる社会的差別に反対し、中小下請・孫請労働者、パート、派遣労働者、障害者、被差別部落、退職労働者、外国人労働者などの不安定労働者の生活と権利を守り、労働者団結の契機を多角的に追求して闘います。
- (6)地域労働運動を強め、反核・反原発・反基地闘争、緑と水を守る闘争、米をはじめ農産物の輸入自由化に反対する農民及び漁民・中小商工業者を含む地域住民の要求と連帯して、自立した社会的文化の確立をめざして闘います。
- (7)軍事大国化、日米安保条約反対、あらゆる核兵器の廃絶、軍縮の促進を求め、天皇制の復活、臨調行革、民主教育の破壊、国家秘密法、予防拘禁法、労働法規改悪など一切の反動的「戦後政治の総決算」路線に反対し、今後の最大の政治的対決点と想定される憲法改悪を阻止し、真の平和と民主主義の創造をめざして闘います。また今日問題となっている、入管法、民事保全法、労災補償制度改悪反対、労働委員会・各種労働関連審議会の公平・民主化を求めます。
- (8)全世界のすべての労働者と国際連帯活動を強め、とくにアジア及び第三世界の労働者との連帯を自覚的に追求し、全世界の平和のために闘います。

◇北海道「清算事業団」の仲間から◇

「二度目」の首切りは許さない！

二月二十四日、J R北海道本社前で総決起集会

残すところ一カ月となった雇用対策期限切れを前に国鉄清算事業団闘争はいよいよ最大の決戦段階を迎えている。国家的不当労働行為による「二度目」の首切りを許すな！と国労（稲田芳朗委員長）は国鉄闘争支援中央共闘会議（中里忠仁議長）の全面的支援を得て三月の中～下旬の闘いに死力をつくし、ストライキを含む徹底した大衆闘争を展開する。

二月二十四～二十五日、北海道と九州の総行動の成功を受け、三月闘争に集中して取り組むことが大衆的に確認された。

防戦一方のJ R北海道

北海道では、「首切り・解雇通告は許さない！J R北海道は地労委命令を守れ！清算事業団の仲間を職場に戻せ、雇用を守れ！」を掲げての総行動で、二十四日、札幌市のJ R北海道本社前の総決起集会には約八百人の国労組合員・家族、支援の労働者・民主団体が結集した。会場となったJ R北海道本社前広場は国労の抗議行動を妨害するため、不自然な植え込みを三箇所も設置。さらに「国労に警告する。J R北海道用地内での集会は禁止します。ただちに解散し退去しなさい」の弱々しいテープのくり返しは、追いつめられたJ Rを象徴しているかのようだ。

主催者の国労北海道本部・永田委員長は「統発する踏切事故、列車事故の根源はJ Rの労使関係にある。重大な時期を迎えたが必ず勝つ確信で総力を上げ闘おう」とあいさつ。

連帯と激励では、全道労協センター・古川事務局長は「連帯が発足したが政治・平和・権利・反合闘争は基本的任務であり、清算事業団闘争を最重要課題として闘う」。日本社会党北海道本部・印田国民運動局長は「石の上にも三年、皆さんは頑張っている。J Rは再度の首切りを狙っているが国会で緊急問題とさせる」。日本共産党北海道委員会を代表して児玉衆議院議員は「なぜ踏切事故なのか、それは六割になった保安要員にある。仲間をただちに現場に戻そう」。国労議員団を代表して榎林道議は「今のJ Rは安全無視・収益優先になっっている。道内の議会決議は過半数を超えた。J Rは法律・命令を守れ」。学者・弁護士を代表して後藤弁護士は「七〇をこえる命令を無視しての首切りは絶対許せない。中労委総会では労働委員会の存立をかけて激論された。出来るあらゆることをやり抜こう」。連帯する会・山下事務局長は「四四団体で中央共闘会議を結成した。一番困っているのは政府・J R・財界で情勢は国労勝利に流れている。苦しい三年間で積み上げられた力で日本列島を騒然とさせ勝ち抜こう」とそれぞれの立場、それぞれの思いを込め力強く激励した。

続いて、国労本部・嶋田副委員長は「百六件の救済命令など闘いによって一カ月前解雇予告をおしとどめている。中央では解決すべきの声が大きくなっており三月中～下旬に闘いを集中しよう」と訴え、家族会・今井中央常任委員は「なぜ夫は首切られたの？大森社長、教えて下さい！」と怒りをぶちまけ「たくさんの激励に勇気づけられ、家族の団結、

夫婦の話し合いを強めてきた。人間らしい暮らしができる日、夫がJRにもどる日まで闘い抜く。清算事業団道協議会・丸岩議長は「昨年の救済命令で自信をもった。仲間から犠牲者（自殺・北見市）が出た。労働者根性をもって最後までくらいついて勝利しよう」と決意を述べた。

雨の中、抗議の盛り込み

引き続き、雨の中抗議の盛り込みが行われ、北海道新聞労組、札幌市職、札幌教組、民主団体からの激励を受け、参加者は交互にJR札幌駅のコンコース行動として横断幕を掲げ、チラシを配り、平行して札幌市内を宣伝カーでJRの不当性と命令守れを道民に訴えた。

その後、夕方から翌日（二五日）の昼まで会場を札幌市・八重州ホテルに移して、清算事業団闘争勝利、「全面解決要求」実現ノ全道総学習交流集會が開かれた。

全道総決起集會の成功を確認したあと、国労本部・嶋田副委員長から「情勢・到達点と当面する闘いの展開」、後藤弁護士「弁護団報告」、国鉄闘争支援中央共闘会議・市毛事務局長から「戦いの山場と今後の展望」、連帯する会・山下事務局長から「情勢と自活・闘争体制の確立」、国鉄問題を考える学者・弁護士の会、三好代表委員の「連帯と激励」を受けて分散会に入り、翌日の総括集會を経て、年度内解決に死力を尽くすことを確認し合った。

この二日間の総行動で、国労組合員と家族が勝利への確かな手ごたえをつかんだ意義は大きく、三月闘争への確かなバネとなるう。
(佐野周二)

資料(3) 一・二四北海道総行動決起集會「アピール」

政府・清算事業団当局とJR北海道は、行政命令、すなわち地方労働委員会の救済命令を守らず、清算事業団支所を閉鎖し、実質上の首切りを強行しようとしている。実に全国で一千八百人もの清算事業団職員を路頭に放り出そうとしている。我々は、断じて、この首切りを許さない。

思えば国労の闘いは、一九八一年暮れからはじまるヤミ・カラ権利剣奪攻撃に端を發し、実に十年間に及ぶ苦闘と苦悩の叫びであり、抵抗の歲月であった。

国労のあたり前の主張と運動、つまり「国鉄を解体するな」「公共交通を守れ」の闘いに対して、政府・資本・当局は、それに応ずるのではなく、労働委員会制度始まって以来の不当労働行為Ⅱ組合間差別採用をもって襲いかかってきた。政府と国鉄当局（JR）は国鉄改革法二三条をもって、歴史をも恐れぬ暴挙Ⅱ国家的不当労働行為の暴挙に出たのである。

不当労働行為と首切りは絶対に許さない。国労と弁護団、多くの学者、文化人をはじめ、労働組合・民主団体の共同した闘いの陣形が広がり、昨一一・二二明治公園五万人集會や北海道自治体決議過半数突破へと確実に政府とJRを追いつめているのである。

あと三〇日の闘いである。多くの国民がこの事件の帰趨を熱い目で注視している。ある人は首切りはあまりにも過酷であるという同情から。また、ある人はこれが許され

るなら不当労働行為が全国の企業に走り回るといふ危機感から。またある人は、安全問題と重ね合せて怒り。またある人は、人権問題でとらえ。またある人は、平和と民主主義の問題として憂い。またある人は、今後の日本労働運動の将来がかかる事件としてとらえ。

……国鉄清算事業団闘争は、こうした多くの思いと怒りと憂いが凝縮され、政府とJRと清算事業団当局へ、その解決を強く求めている。

国労そして、中央共闘と連帯する会をはじめ多くの民主団体、人士の懸命なる三月闘争の結果、未決着の場合、当然にも、その根本的解決を求め自活方針で断固たる闘いの道を歩みつつける。国労の四月越えの闘いに、最も恐れをいだいているのが他ならぬ、政府でありJRである。

①一千名を超える日本列島を縦断する闘争部隊②三万人を超える企業（JR）の国労組合員③「中央共闘」百八十万と「連帯する会」、そして地域の支援共闘④法律的には既に決着し、いかにJRが事件を引き伸ばそうとしても、この勝利は不動である。⑤JRの安全問題、JR内労使共同宣言、労働組合員の不満と不安の増大、国鉄長期債務の累増等々⑥何よりも、国労のこの間の不当解雇撤回闘争は、犠牲制度（組織が生活資金を保証）のもとでの闘いであった。ところが今回の闘いは、自らが稼ぎ、そして自らが国鉄清算事業団闘争の先頭に立つ。かつてなかった国労の闘争形態である。

この闘いに確信をもとう。樂觀も悲觀も排斥し、この有利な情勢を確かな勝利へと結びつけるため、何より首切られようとしている我々が、最先頭にたち頑張り抜こう。

勝利をわれらに！勝利をこの手に！

あわてず、ひるまず、おこたらず、断固たる勝利の王道を歩みつつけよう！

JR北海道よ中労委の場へ出てこい。

JR北海道 大森社長は、ただちに国労に陳謝せよ！

JR北海道 大森社長は初審命令に従い俺たちをJRの職場に戻せ！

◆編集部だより◆

▼国鉄清算事業団は三月九日、「雇用対策の終了時の取扱について」を国労などに通告した。その内容は(1)十日以降、辞職願を受けつけ(2)十九日の締め切りまでに辞職申請書を提出しない職員は解雇し(3)本人には二十日に解雇を予告するというもの。

▼この日は国労の中央委員会。正午すぎ、東京駅前の清算事業団・本社ビルを清算事業団労働者、国労組合員、支援の仲間たち千五百人がとりまいた。

▼「二度目の首切り」は絶対に許せない。読者のみなさん、国労への支援と連帯を。

▼東欧から舞台はソ連へ。中南米ではニカラグアが敗北し、チリは民主政権へ。情勢は内外ともに複雑さえましている。正確な分析に心したい。

▼激動する情勢のなかで着実にとりくまれてるのが、職場と地域における「理論と実戦」。編集部の定例学習会も十指を数える。ぜひ報告を、そしてニュースを編集部に送っていただきたい。

◇シンポジウム「自治労運動を考える」に参加して◇ 組合民主主義が組織問題の焦点

二月二五日のシンポジウム「自治労運動を考える——自治労運動の課題と展望」に参加して感じたことは、二点あります。

ひとつは、今、労働戦線問題をめぐって自治労内で問題になっているのは、民主主義だということ。右派と共産党の党派の利害を優先させるのではなく、組合員一人一人の直接的な意思に基づいて機関運営をしていくことが重要。労働組合内部の民主主義を強めることが、日本の社会の民主主義を強め、反独占・反ファシズム・民主主義擁護の統一戦線の条件を強固にすることになるから。

今、日本では、「民主主義の確立」がようやく広範な国民の意識になってきたと思います。天皇死去、参院選・衆院選・消費税を通じ、そして、最も悲劇的なことには、長崎市長の本島等氏を通じて。二度と民主主義が、自由が侵されることがあつてはならないということが、多くの国民の意識になりつつあります。ソ連・東欧の経験を通じて同じことがいえます。

しかし、その国民の先頭に立つべき、労働組合の内部で、民主主義が貫かれないという状況があります。自治労内の組織問題は、民主主義的討論と指導なくしては解決できません。具体的な討論の方法（アンケート・職場討論・学習会・一票投票等）を、先進単組・職場に学びながら、実行することが大切です。

感想の二点目は、個別課題での運動の交流が現場の活動家から求められているということです。このことは、裏を返せば、産別組織が本来はたすべき、運動と情報の集中・連絡・交流・指導のセンターとしての機能が失われてきていることだと思えます。

職場の組合員や下部活動家・下部役員は、職場で毎日起こってくる具体的な問題、特に、今まで自治労内でもあまり論議されてこなかったような新しい問題（激しい合理化、民間下請化、コンピュータ導入、外国人労働者問題、プライバシー保護、情報公開など）にぶつかって悩んでいるのです。闘い方はおろか、その問題の本質についても理解されていないことがあります。

本来、こういう状況を克服するために産別組織があるはず。どんな問題でも必ず、一番先にぶつかっている職場があります。その経験を教訓化し、指導し、広めるのが産別の役目です。進歩的な「学者・文化人」に意見を求めることもできます。しかし、この機能が、連合路線・幹部請負主義に傾斜することによって不十分なものとなってきているのではないのでしょうか。

といって、共産党の人たちのように、産別機能を喪失したという理由で別組織をつくっても問題は解決しません。全国連絡協が、民主主義を否定した状況で組織された限りにおいて、それは職場組合員の声・悩みを重視するものとはならないからです。

今の自治労の状況の中でも、最大限、機関の中で、運動の交流・経験に学ぶという努力が必要です。例えば、コンピュータ合理化問題や、外国人登録問題（指紋捺捺など）では、「反連合」の単組より、そうでない単組（大阪市職など）の中に、その問題を真面目にとりこんでいる組合員や下部役員がいるのです。そういう単組・組合員と交流する中で、本当の全国統一闘争をつくりあげることができるはず。口先だけの「左」ではだめです。今、起こりつつある新しい問題、攻撃に対抗できる活動家をつくる必要があります。そのためにも、自治労産別運動の変質を許さないことです。職場の組合員の声が、県本部・中央本部に反映されるようにすること、大衆に依拠した、民主主義確立の戦いが、ここでも重要になってくるのです。

(H)

◇ 読者からのおたより ◇

何としても勝つ 国鉄清算事業団闘争はいよいよ三月段階の集中した闘いになりました。二月二四―二五日におこなわれた「北海道総行動」の報告を同封します。職場の仲間の多くも三月末解決にむけて、やれることをやり切ろうと行動を通して、情勢の有利さに確信をもちつつあります。三月闘争勝利のため、この二週間の取り組みがすべてを決するといっていると思いますのでがんばります。なお国労釧路地本では、四月以降の自活体制のプロジェクト・チームを結成し、何としても勝ちぬく体制の議論を開始しています。

(北海道・S)

再び空白区に 山形二区、またしても社会党の空白区にしてしまいました。次回こそ、でも旧態依然とした動員方式のみでは限界があります。青年共闘の上がり込んでの話し込みを積み上げていくしかないと思っています。

(山形・S)

二名擁立! はや総選挙も終盤戦。茨城三区も一二月末になり二名擁立が決まりました。私たちも初めての経験です。その闘いの勝利と組織力量強化のために奮闘しているところです。

(茨城・S)

県教組の「再建」 埼玉にも、日教組につながる県教組が再建されました。これですっきり活動できると喜んでいる人もいますが、下から本物の労働運動を積み上げていくことで、日教組の変質をくいとめていく一つの力になりたいと思っています。仲間の詩と資料を送ります。

(埼玉・S)

総選挙と国鉄闘争と 選挙闘争で社会党の勝利と党の強化を、清算事業団の闘いも、仲間とともに勝利にむけてがんばります。

(旭川・S K)

おかしいゾ、J R総連 J R総連は年金、雇用で世話になったとして、自民党候補をすいせんしたそうですが、何ともおかしなことです。「分割・民営化」を進め国労組合員を不当差別、大量強制首切りした張本人と国労つぶし、国鉄財産の山分けを画策した政府・自民党を支持するなど、狂気の沙汰です。

(中野・W)

日教組再生の闘い 清算事業団闘争もいよいよ正念場。反連合勢力の意地の見せ所だと自他ともに励まし合っているところです。教育労働者の職場・単組にふみとどまってファンバル仲間たちの共通の思いにも通じているように思えます。日教組本部の誤りを自覚せしむるような壮大な闘いに育てたい。

(立川・T)

ヤッター! 神戸での岡崎氏の当選。思わず「ヤッター!」とTVを見ながら拍手を送りました。いよいよこれから左派国会議員の出番です。国鉄闘争をはじめがんばってほしいものです。社会党を社会党らしく、たのもしくするためにも!

(豊中・O)

社会党は勝ったが 総選挙で社会党はたしかに伸びましたが、政変はなく、ますます社会党の責務は大きくなりました。社会党の政治路線がますます右傾化することが心配です。社会主義への意志をなくしていく社会党を建て直すことができる展望を与えるのは、「通信」の役割です。これからも充実した内容で力を貸してください。

(大牟田・K)

労働者の立場の情報を 最近はとくに党や労働運動の情勢も社会主義国の情勢も、労働者の立場に立った正しい情報が欲しいと痛感します。マスコミの力にはなかなか追いつけません、職場で何がおこっているのかを話しているところです。

(神戸・K)